

P2-424 低用量アスピリンを妊娠末期まで内服した場合の母児への安全性に関する臨床的検討

国立成育医療センター周産期診療部

望月昭彦, 渡辺典芳, 鈴木啓太郎, 和知敏樹, 新家 秀, 小澤伸晃, 左合治彦, 久保隆彦, 北川道弘, 名取道也

【目的】抗リン脂質抗体症候群や習慣流産症例に対して胎盤梗塞や母体の血栓予防のために低用量アスピリン (LDA) 治療が行われているが、その母児への副作用や合併症の出現に関する報告は少ない。今回我々は妊娠末期まで LDA 内服を行った症例の母児の副作用や合併症の出現について解析し、LDA 治療の安全性を考察した。【方法】2002 年 3 月から 2004 年 8 月までに当院で分娩となった 3,257 例のうち、患者の同意の下に妊娠末期まで LDA 内服を継続した 47 症例について、後方視的に出血量や分娩時間などの分娩経過や分娩後の母児経過について検討を行った。【成績】LDA を継続投与した症例の内訳は、抗リン脂質抗体陽性 16 例、他の自己抗体陽性 11 例、原因不明の習慣流産 16 例、その他 4 例であった。経陰分娩症例は 29 例で、在胎週数は 39.0 ± 1.3 (週)、出生児体重は $2,999 \pm 352$ (g) であり、分娩前のヘモグロビン (Hb) 値は 11.0 ± 0.9 (g/dl)、分娩時出血量は 422 ± 235 (g)、分娩 4 日後の Hb 値は 10.3 ± 1.1 (g/dl) であった。分娩所要時間は初産婦で 11.4 ± 6.4 (時間)、経産婦で 5.0 ± 2.5 (時間) であった。また帝王切開術施行症例は 18 例で、在胎週数は 36.4 ± 3.1 (週)、出生児体重は $2,416 \pm 784$ (g) であり、分娩前の Hb 値は 11.6 ± 1.0 (g/dl)、術中出血量は 922 ± 447 (g)、帝切 6 日後の Hb 値は 10.2 ± 1.6 (g/dl) であった。全分娩症例を通じて、いずれも分娩後の母体経過は良好であり、新生児経過においても出血傾向、頭血腫、過度の体重減少などを呈した症例は認められなかった。【結論】本邦では出産予定日 12 週以内の妊婦への使用は禁忌となっているが、胎盤梗塞や血栓症を予防する意味で妊娠末期まで LDA の内服を継続しても、母児への危険性は少ないと考えられた。

5
日
火
一
般
演
題**P2-425 過去 5 年間における妊婦健診時子宮頸部細胞診の結果**群馬・桐生厚生総合病院¹, 群馬大²鏡 一成¹, 清水和子¹, 松井啓人¹, 岡村寿子¹, 深石孝夫¹, 田村友宏², 高木 剛²

【目的】若年層の子宮頸癌スクリーニングは近年重要性をますます強めている。その中で妊婦に対する子宮頸部細胞診は有力な方法と思われる。そこで当院妊婦外来における子宮頸部細胞診の現況を検討した。【方法】平成 12 年より平成 16 年 6 月までに当院を受診した妊娠女性のうち、採取が確認できるのべ 2,019 名の細胞診結果を検討し、クラス IIIa 以上はその経過を調査検討した。採取部位は子宮腔部のみ実施している。採取時の平均妊娠週数は 16.2 週であった。【成績】対象妊婦の平均年齢は 29.5 歳、細胞診年間件数は平成 12 年 362 件、同 13 年 454 件、同 14 年 409 件、同 15 年 484 件、同 16 年 310 件 (6 カ月間) であった。このうちクラス IIIa 以上は各年で 1 件、16 件、23 件、17 件、8 件 (6 カ月間) あり、陽性率にして 0.3%, 3.5%, 5.6%, 3.5%, 2.5% であった。さらにそのうちクラス IIIb は 5 年間を通じて 4 件、クラス IV は 3 件、クラス V が 3 件あった。妊娠中の円錐切除が 1 例あり、また 4 例が分娩後円錐切除に至った。子宮全摘術を実施した例はなかった。5 例が、妊娠中の細胞診がきっかけとなり子宮頸癌と診断された。うち 0 期 3 例、Ia1 期 2 例であった。【結論】妊婦に対する細胞診クラス IIIa 以上の陽性率は平均 3.1% であった。陽性例のうち 85% は IIIa であった。一方、平成 16 年度には半年間でクラス V がすでに 2 例見つかっている。近い将来悪性例の増加傾向が明らかとなる懸念がある。若年女性に対する子宮頸癌スクリーニングの一環として妊婦の細胞診は今後も重要な役割を果たすと考えられる。

P2-426 糖代謝異常妊娠における中毒症発症の有無による周産期事象の検討 (日産婦周産期登録システムのデータベースを用いて)

三重大

日下秀人, 吉田 純, 村林奈緒, 杉山 隆

【目的】糖代謝異常妊娠では、妊娠中毒症などの母体・胎児・新生児の合併症の発症頻度の高くなることが知られている。しかしわが国における大規模なデータに基づく糖代謝異常妊娠群における妊娠中毒症の発症頻度や、糖代謝異常妊娠と正常妊娠を比較検討したデータはない。そこで今回我々は日本産科婦人科学会周産期登録システムのデータを用いてとくに糖代謝異常妊娠と妊娠中毒症発症の周産期的関連について後方視的に検討したので報告する。【方法】2001 年の日産婦周産期登録システムのデータベースを用いて、糖代謝異常妊娠 (妊娠糖尿病および妊娠前糖尿病を含む) 771 症例と正常妊娠 6,926 例の周産期事象を比較検討した。多胎妊娠や母体合併症の認められた症例は除外した。周産期事象として、母体年齢、分娩回数、妊娠時体重増加、分娩時週数、出生体重、胎盤重量、分娩時出血量、妊娠中毒症発症などににつき比較検討した。さらに糖代謝異常妊娠群の中で妊娠中毒症の発症の有無による周産期事象の比較検討も行った。【成績】糖代謝異常妊娠では正常妊娠に比し、母体年齢が高く、分娩回数が多く、分娩週数は早く、体重増加は少なかった。また出生体重、胎盤重量、分娩時出血量、帝王切開率が高く、妊娠中毒症の発症率は約 3 倍高かった。さらに糖代謝異常妊娠の中で妊娠中毒症を発症した群では、分娩時出血量、帝王切開率が高く、分娩週数は早く、分娩回数が少なかった。【結論】糖代謝異常妊娠では正常妊娠群に比し、妊娠中毒症を含めた周産期合併症の頻度は高く、糖代謝異常妊娠の中で妊娠中毒症を発症した群ではさらに周産期予後の悪くなることが判明した。